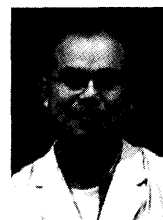


Germination

エミューでバイオインダストリー

中川 智行



若手のページ

『エミュー』ってご存じですか？

エミューはオーストラリア原産のヒクイドリ目エミュー科に属する走鳥類で、ダチョウについて世界で2番目に大きい鳥類です。オーストラリアの原住民アボリジニーは古くからその肉や皮、油を利用し、生活してきましたが、最近ではこのエミューが次世代の家畜種として注目され、すでにその飼育は始まっています。

エミューが家畜として注目される理由は、(1) エミュー肉が低脂肪、低カロリー、低コレステロールであり、そのオイルはオレイン酸やリノール酸に富む上、革や羽根も加工・利用可能であること、(2) 体長が1.7 mほどで体重が50～65 kgあること、(3) 性格が温厚で飼育しやすいこと、(4) 時速40 kmで走るが、空を飛ぶことができないので放牧が可能、(5) どのような気候（網走のような寒冷地）でも容易に飼育できる、などなど、家畜としてのさまざまなメリットがあるようです。

さて、どうしてエミューの豆知識からはいったかといえますと、私の所属する東京農業大学生物産業学部（北海道網走市）は、学生・教員、地元企業家、さらには網走市の協力のもと『株式会社 東京農大バイオインダストリー』を2004年4月に発足させました。俗にいう大学ベンチャー企業である『東京農大バイオインダストリー』は経済産業省の特例制度を利用した資本金1円の株式会社であり、学生が取締役に就任し、学生自身で定款を作成した珍しいベンチャー企業です。つまり、本社の最大の目標は実践的な研究・教育活動の場を学生に提供することであり、その活動を通して私たちの学部のコンセプトである生物産業（バイオインダストリー〔生物生産—一次産業—、加工—二次産業—、経営・流通—三次産業—を網羅した研究・教育〕）を21世紀のビジネスモデルとして発展させていくこと、さらには本事業を通して本学が地域貢献していくことにあります。そこでまず、最近、オホーツク地域で家畜化された『エミュー』（現在200羽で国内最大）を手始めに、事業を展開していこうということです。

そもそも本事業は、網走市民の方が愛玩用にエミューの飼育を本学部生物生産学科に依頼し、これが「あれよあれよ」という間に200羽にまで繁殖してしまったことに端を発したものです。そこで、このエミューをうまく



活用しようということで、本学部食品科学科が「エミューどら焼き」「エミューウインナー」を次々と開発・製品化し、その販路開拓を産業経営学科が担当することで、学部を挙げて取組む形になっていきました。そして、現在では学生をも巻き込んだ形で、エミューの繁殖技術の提供・生産、新たなエミュー商品の開発、さらにはインターネットなどでの販売戦略など『東京農大バイオインダストリー』を通じた教育が歩みはじめたところです。

先にも記したとおり、東京農大生物産業学部はオホーツク地域・北海道網走市に位置する最北の農学系キャンパスです。大多数の方は『網走』というと刑務所、最果ての地というイメージを持たれると思いますが、実はオホーツクは日本有数の大規模・高生産を誇る農業・畜産地帯でもあり、流水の恵みで世界三大漁場に数えられるオホーツク海に臨み、さらには世界遺産への登録が進められている知床や阿寒の森など恵まれた自然環境・資源をも有する生物産業の最前線でもあります。これらは多くの都市型大学では得がたいものであり、オホーツクキャンパスは地球規模で考えなければならない問題（例えば人口・食糧問題に対する未利用資源の活用、自然環境の維持・保護など）に対して直接実践・実感できるという大きなメリットを有しています。つまり、ここオホーツクは生物産業の研究・教育の場に最適な地域であり、その環境・資源を研究材料に、本学が社会貢献・情報発信を目指していく上で『東京農大バイオインダストリー』は大きな意味を持つものと考えています。

この豊かな大地だからこそ「エミューでバイオインダストリー」、「オホーツクから生物産業」なのだと思う今日この頃です。

（ホームページアドレス <http://www.nodai-bio.jp/>）

著者紹介 東京農業大学生物産業学部食品科学科 食品応用微生物学研究室（講師） 〒099-2493 北海道網走市八坂196
TEL. 0152-48-3845 FAX. 0152-48-3845 E-mail: t-nakaga@bioindustry.nodai.ac.jp